

朝鮮戦争時の米軍細菌戦の被害調査報告(第二弾)

——被害者、遺族らからの聞き取りを中心に

中嶋 啓明

1950年代初頭の朝鮮戦争下における米軍による細菌戦実行をめぐる疑惑については、現在も朝鮮民主主義人民共和国(朝鮮)で健在する被害者、目撃者、研究者らの証言などを元に、先に本誌1号(2004年刊)で「朝鮮戦争における米軍の細菌戦被害の実態」として報告させていた(以下、前回報告)。ここでは、その後の現地取材の結果を中心にあらためて報告しておきたいと思う。

前回報告は、2001年から2003年までの合計3回にわたる訪朝取材と、1990年代末から日米を中心にあらためて広がっている否定キャンペーンの現状を中心に検証したものだ。今回は、それ以後、2005年夏に朝鮮の被害現地を訪問して調査した内容と、日本国内での文献調査の内容等を付け加えて書き記しておくことにする。前回が総論的な報告だったのに対し、今回はやや細かい各論的なものになる。

今回、私は静岡大学非常勤講師の森正孝氏とともに、2005年7月22日から28日にかけて朝鮮を訪れた。この間、平壤を中心に細菌戦疑惑の関係地を訪れ、計十数人から聞き取り調査を行った。

雪の上に無数のアリが落ちていた

最初に訪れたのは、以前の訪朝取材でも訪れていた平壤郊外のソンオリ(松烏里、平安南道江原道元灘面)。平壤市内を流れるテドンガン(大同江)上流のプッカン(北江)のほとりにある。平壤とはテドンガン沿いに数十キロ離れている。ここには、1952年2月末、川一面に真っ黒になるぐらい、羽アリののような昆虫がばら撒かれ、飛び立つこともできずうごめいていた。前回訪れたときには、直前に降った雨のため川の水かさが増し、現場に立つことができなかったため、今回、あらためて現場を訪れることにし

たものだ。ここでは、前回対応してくれたリ・ヒョンジョンさん(1936年2月6日生)、リ・サンボムさん(1933年5月8日生)、チェ・ギョンソクさん(1938年10月29日生)、リ・グァンドさん(1935年1月15日生)の4人が今回も私たちの補足取材に快く応じてくれた。

4人は次のように話した。

チェ・ギョンソクさん「川に張った氷の上を歩いて学校に通っていたとき、周辺にアリののような昆虫が無数にうごめいていた。寒い時期で、ほとんど動けない状態だった。1メートルぐらいの長さの鉄製の容器も2つ見つけた。中に仕切りがあり4つに空間が分けられていた。後に、上部機関から細菌弾に違いないと公表された」

リ・ヒョンジョンさん「当時、村の自衛隊員として活動していた。2月28日ごろのことだった。防疫隊が来て、散らばっていた昆虫を集めるなどの作業をした。その際、周囲を遮断し、2週間ほど地域を隔離する任務に携わった」

リ・サンボムさん「仕事に向かう途中、遮断されている地域があり、細菌弾があるから入ってはいけないと指示が出ていた。細菌弾が運ばれるのを見た」

リ・グァンドさん「学校を卒業し、農場員として働き始めたときだった。現場一帯に変わった形のアリがいっぱいいるという話を聞いて駆けつけ、無数のアリののような昆虫が散らばっているのを見た。箒でかき集め、シャベルでたたき殺したり、焼き殺したりした。中央から防疫隊が来て、細菌弾だと言った。川は平壤へ向かって流れていて、平壤市民にとって水源だった。米軍が細菌戦を実行したというあくどい罪業については私たちは知り尽くしている。この事実を世界中の人に知ってもらいたい」

4人によると、ソンオリは、北に向かって避難する人たちが通過し、スンチョン(順川)方面

とヤンドク方面に分かれる分岐点となっている交通の要所だったという。

ヒョンジョンさんは、当時、平壤で開かれていた細菌戦に抗議する展示会に行ったことがある。53年の初めごろだった。ガラスケースの中には、ソンオリの現場で見たのと同じ、細菌弾に使われた鉄製の容器が展示されていた。昆虫なども展示されていたという。

彼らは、南の韓国軍兵士としてやってきた日本人を見たこともあると話した。

前回報告で若干、触れたが、ソンオリには当時、ハンガリー人ジャーナリストのティボー・ミレイ氏が取材に来ている。ここでの取材体験は、彼を否定派に変えるきっかけになっている。米軍機が昆虫を散布したとしても、それが現場を訪れるまで数日間も川面や雪の上で生存していたことが疑問だというのが、その理由のひとつだ。

4人に、ヨーロッパ人ジャーナリストが現地を訪れたかどうかについてあらためて詳しく聞いてみたが、やはり誰も知らなかった。

ミレイ氏は当時、米軍による細菌戦実行を事実と信じ、同様に朝鮮各地で戦争取材に当たっていた各国のジャーナリストらとともに、米軍に対する抗議のアピールを発している。アピールは、1952年に「The Chinese People's Committee for World Peace」が北京で出版した『Stop US. Germ Warfare!』の中に収録されている。一緒に名前を連ねているのは、『民主朝鮮』のキム・チョンヨン、上海・香港などを中心に発行されていた『Ta Kung Pao (大公網)』のチュウ・チピン、イギリス・ロンドンの『デイリー・ウォーカー』のアラン・ウィニングトン、フランス・パリの『Ce-Soir』のウィルフレッド・バーチェット、ポーランド・ワルシャワの『Zolnierz Wolnosci』のルシアン・ブラッキら著名なジャーナリストの面々だ。

アピールは、平壤市南門里のハン・サングク（韓相国）さんの事件（後述）とともにソンオリなどのケースに触れて、米軍の細菌戦に抗議している。

このアピールには、上記のように、現在、朝鮮政府の内閣の機関紙として日本などでは理解されている『民主朝鮮』の記者キム・チョンヨン氏が名前を連ねている。

細菌戦自白の米軍捕虜に取材

私たちは今回の訪朝で、この『民主朝鮮』でやはり記者を勤めていたユン・チャンウ氏（1925年3月20日生）に会うことができた。

ユン氏は、米軍の細菌戦については、専門的に取材をしていたわけではなかったという。収容者に対する転向強要などが行われているとして、米国をはじめとした西側から批判の対象にあがっていた捕虜収容所の問題について専門的に取材をしていた（捕虜の処遇の問題については、南側、米軍側に捉えられた朝鮮、中国の兵士らに対しても、すさまじい拷問、転向強要がなされていたことも指摘しておかなければならない）。そしてユン氏は、中朝国境の平安北道ピョクトンにある収容所に出向き、西側の非難に根拠のないことを確認するとともに、偶然、捕虜として収容されていた米軍機のパイロットらとも雑談する機会を得、彼らから細菌戦実行の"自白"とも言える証言を得たのだという。その体験についてユン氏は私たちに話してくれた。

「ピョクトンの収容所で捕虜の米兵らと話をした。話をしたのは7、8人。そのうち3人がパイロットだった。パイロットらは、『爆撃のとき細菌弾から先に放て』、『細菌という言葉は一切使えな』などと命令されたと話した。その中にマフーリンがいた。マフーリンは、南朝鮮のテグに細菌戦の基地があったと話した。基本的にハンギョンブクト（咸鏡北道）を爆撃し、新安州からケチョンにかけてなどと担当区域を割り当てて細菌弾を落としたという。補給路を断つために遮断区域を作ろうとする米軍の戦術だったようだ。この区域にはしょっちゅう細菌弾を落とした。テグの基地にはトンネルがあり、そこから出撃したという。細菌弾は、秘密のため夜間に落とした。パイロットは厳しい選抜を経て選ばれていた。マフーリンは、安州に細菌弾を落としたと言っていた。近くの鉄橋を目標に爆撃した、と。細菌兵器は日本に置いてあったと証言した。アメリカの研究所に行くよう命令され、そこへ出向くと、様々な細菌弾があり、それらの扱い方や落とし方、低空での観察方法などについて教育を受けた。日本の基地で、爆撃連隊ごとにとどの細菌弾を、いつまでに受け取る

ようになどの命令を受けたと話した」

氏の言うマフーリンとは、第二次世界大戦のヨーロッパ戦線から太平洋戦線、朝鮮戦争と転戦したウォーカー・「バド」・マフーリン空軍大佐のことだ。アメリカでは知る人ぞ知る「英雄」らしい。マフーリン氏は捕虜になっていた間に細菌戦実行を自白し、その供述調書が中国側から発表された。しかし釈放後、自白は洗脳によるものだったと主張して供述を翻している(http://www.acepilots.com/korea_mahurin.htmlなど)。

マフーリン氏が証言したというユン氏の話の中に出てくる安州の被害現地には、私も2003年に赴いている(その取材結果は、前回報告に書いた)。その際、話を聞いた被害者らも、安州では近くにあった鉄橋が攻撃目標にされたようだ、と証言していた。

ユン氏は、自身も細菌戦によると見られる感染症にかかり生死の境をさまよっている。1950年10月から11月にかけて発病した。人民軍に従軍して取材中、チャガンド(慈江道)のマンボ(満浦)の山中で病気になった。食欲がなくなり、寒気、嘔吐などの症状に2ヶ月間、悩み、一時期は意識不明になった。髪の毛がほとんど抜けてしまった。医者は田舎の医者で、腸チフスと診断したが、当時、人民軍の兵士らに流行っていた再帰熱だったようだ。撤退先の農家で看病を受け、何とか意識を取り戻したという。

またユン氏は従軍中、細菌兵器とみられるハエや蚊、アリ、ノミ、南京虫等の昆虫がばら撒かれているのを何度か目撃している。51年から52年にかけて、江原道のヘアン郡、金剛郡などでのことだ。昆虫は、通報を受けた防疫隊が駆けつけ、すぐに隔離、焼却などの防疫処理を施していたという。

自白を翻したパイロットらをはじめ、細菌戦の実施を否定し続ける米国などの主張に対しユン氏は「きょうとあすで言うことが違う。日帝も同じだ。きょう事実を認めてもあすになると覆すのが米帝のやり方だ。怒る価値もない」と話す。

当時の衛生防疫局、微生物研究所跡を確認

私たちは今回も、キム・ソンジュン氏(1918

年6月12日生)、キム・ラクチュ氏(1924年10月12日生)の両氏に会った。ソンジュン氏は、朝鮮戦争当時、共和国の保健省衛生防疫局長で、細菌戦に対し前線で、流行する伝染病が米軍の攻撃によるものであることを調査、分析して特定し、それに対する予防対策を立てた人だ。ラクチュ氏は、コレラ専門の細菌学者。現場から送られてくる検体から菌を検出、分離、特定して、伝染病が米軍の細菌戦による結果であることの傍証を導き出した。

両氏からは、当時の保健省、衛生防疫局が、平壤市内のどこにあったのかを、詳細に聞き出した。

だが、朝鮮戦争では、米軍による徹底した空爆などによって、当時の建物は完全にとってもいいほどに破壊され尽くした。地形が変わるほどまでにだ。現在の平壤市は、戦後造られたもので、当時の面影は全くないという。ソンジュン氏、ラクチュ氏らの記憶をたどりながらの取材は、困難を極めた。

両氏の話では、当時の保健省は、現在の市中心部にある人民大学習堂の近辺にあった。現在、第二百貨店になっているあたりだという。当時の住所では南門里。現在は、平壤市中区域に当たる。

衛生防疫局は2、3階建ての建物で、保健相の部屋には、細菌戦の攻撃地となったことを示す、赤い印のつけられた朝鮮の地図がかけられていたか、との私の質問に対し、ソンジュン氏は「あったように思う」と答えた。

ハンガリー人ジャーナリスト、ティボー・ミレイ氏は、平壤到着後、細菌戦の現場取材に出る前に保健省を訪ね、保健相から取材している。その際、赤い印のついた朝鮮の地図の前で説明を受けた、と後に記している。保健相から、印は細菌戦の攻撃対象になった場所だと説明を受けたという。また、南門里の2番通り6番ビルで予防接種を受けたとも書いている(前回報告注記資料)。

当時の保健相は、リ・ビョンナム氏。

ソンジュン氏は、リ保健相とともに1952年2月20日に開かれた軍事委員会の拡大会議で、キム・イルソン主席(当時は首相)ら政治・軍事の指導者らに前線各地で急に流行した伝染病について説明している。この会議の議論を経て朝

鮮は2月22日、当時の外相朴憲永名で米軍に対する抗議声明を出したのだ。ソンジュン氏の話によれば、この会議が開かれたのは、平壤郊外のピョンソク（平城）ではなかったかという。中部戦線を担当して調査したソンジュン氏は、後方戦線を担当したり保健相とともに説明した。会議には、各省の副相級以上、100人にも及ぶ多数の人が出席していた。

会議は午前9時半に始まり、ほぼ午前中いっぱいだった。会議後、ソンジュン氏らは、防疫対策を立てるよう指示を受けている。この会議でしたためられた文書が、最高司令部命令書、軍事委員会命令書などだった。この会議で朝鮮は、前線で流行る伝染病が米軍による細菌戦実施の結果だとの確信を得、抗議声明を発することを決めた。

ソンジュン氏は、衛生担当者として、捕虜らの健康問題についても関わっている。この関係でソンジュン氏もピョクトンの捕虜収容所で、細菌戦の実行に最前線で実際に携わったパイロットらの話を聞いている。国境を流れる鴨緑江で遊泳していたパイロットらと雑談した。捕虜らの衛生対策などについて話をしたのだが、その中で、パイロットらは磁器爆弾や陶器爆弾など、中身が分からないまま落とした、などと話したという。パラシュートをつけて爆弾を落としたと話す捕虜もいたようだ。話をしたのは52年の夏のことだった。

一方、ラクチェ氏は、当時微生物研究所に勤めていた。微生物研究所は、朝鮮戦争前は平壤市内にあったのだが、戦争中は新義州の郊外に疎開していた。そうした中の1952年当時、ラクチェ氏は、一時的に防疫機動隊に所属した。防疫機動隊は、平壤郊外のテソンサン（大城（聖？）山）のふもとにあった。現在は、動物園になっている。私たちは、この動物園も訪れてみたが、もちろん機動隊の跡形も無い。当時は3階建ての建物で、獣医の微生物研究所だったという。

そのテソンサンのふもとにあった機動隊も、再三の爆撃を受けて場所を変えている。

ラクチェ氏は、この機動隊で、現地から送られてくる感染が疑われる食物や患者の大便など検体を調べていた。52年3月には、嘔吐や下痢がひどく急性食中毒の症状を呈した患者の大便や

腸内の試料が送られてきた。それを検査したところ、コレラ菌が検出されたという。民主法律家協会による国際調査団（後述の科学調査団と異なり、法律家らで組織されたもの）報告などにも記されているハン・サングクさんの事件に関するものだった。この年3月上旬、平壤市南門里で、コレラが発生し、ハン・サングクさんと孫の2人が死亡した事件だ。

ラクチェ氏は、前回報告にも書いたように、テドン（大同）郡のコレラ事件で菌検出に携わった。今回、ラクチェ氏は、私が「テドンの事件の前の1952年3月の」と言いかけた質問に、即座に「ハン・サングクさんの事件か」と応じてくれた。印象が強い事件だったようだ。ラクチェ氏によると、テドンの事件もハン・サングクさんの事件もともにコレラ菌は稲葉型と呼ばれるものだった。その他、ラクチェ氏が検査したものに、他地域で小川型の菌もあったという。

ラクチェ氏は私の質問に対し、国際科学調査団の報告書に記載のある医師、細菌学者、研究者らの名前を次々に確認してくれたが、それらの人々はすべて既に亡くなっていた。ラクチェ氏は、中国人で世界的に著名なペストの専門家であった故陳文貴氏とも面識があったと話した。

朝鮮で進む被害者の名簿作り

国際科学調査団の報告書に記載のある被害者遺族にも話を聞くことができた。調査団の報告書に「K a n g - S o u」（江西郡）のペストの被害者として「P a k Y u n - H o」の名前が出ている。だが、私たちの前に現れたのはパク・ユンハ（「ホ」ではない）さんという77歳（1928年8月26日生）の女性だった。調査団報告書には「P a k Y u n - H o」と並んで、目撃者の一人として「S o n g C h a n g - W o n」（ソン・チャンウォン）という名前があがっているが、パクさんの証言によると、細菌戦によるとみられる感染症にかかったのは、ソン・チャンウォンさんで、パクさんは、その妻になる。戦争時の混乱の中、しかもイギリス、スウェーデン、ソ連、ブラジルなどといった各国の科学者、研究者らからなる調査団の、通訳を挟んだ（であろう）やりとりによる調査の結果、生じたミスなのだろう。以下は、パクさんの証言だ。

1952年7月ごろのことだ。ソンさんは、当時住んでいた江西郡ソnte面クムソン里の村で自衛隊の隊長をしていた。そのころすでに、米軍が朝鮮各地で細菌戦を展開しているというのは、衆知の事実だった。ソンさんは、細菌弾が、村内のあっちに落ちた、こっちに落ちたとの情報を聞いては駆けずり回っていた。ある日、そうした活動から帰ってきてしばらくすると、高熱が出、食欲がないと横になった。翌日、ソンさんは起き上がることができなくなり、口から血を吐いて3日目から意識不明になった。のどや脇の下などが腫れていた。2ヶ月あまり苦しんだ後、3ヵ月後になってやっと起き上がることができるようになった。しかしその後、後遺症で一生、病院通いを強いられる身になった。寝込んでいたときにはうわごとで、「ノミ!、ノミ!、ノミ!」と叫んでいた。その後、ソンさんは7年前、「ノミが憎い。このカタキを打ってくれ。恨みを晴らしてくれ」と口から血を吐きながら死んだ。

パクさんは「敵のことを考えると嘔み付きたくなる。敵はどれほど人間を殺したのか。敵を打ち倒して殺しても胸のわだかまりは晴れない」と、涙を流し体を震わせながら話した。

この他私たちは、他地域の事件の遺族、目撃者らにも会った。

平原郡ソnfア里に住むキム・チンハクさん(1936年12月13日生)。チンハクさんは、平原郡ハンチョン面カムイ里に住んでいた当時の1952年春、父親を熱病で亡くした。ある日、村の前の平原にハエが大量に落ちているのを見つけた。ハエは、それまで見たことのない、大きく黄色い色をしたものだった。雪が溶け始めたころで、ハエは雪の上に散らばっていて飛ぶことができない様子だった。村には当時、20戸ほどの家があったが、ハエが見つかったからすべての家で患者が出始め、3日おきに死者が出たという。6人家族だったキム・チンハクさんの家では、母を除く全員が病気にかった。40度ぐらいの高熱と吐き気で起き上がることができず、父親は発病して15-20日ほどで死亡した。チンハクさん自身も1月ほど床に伏したという。

隣村のチョンサン面に住んでいたシム・ドクファさん(1935年6月4日生)も、同じ52年2月末ごろ、村で大量のハエが落ちているのを目撃している。ハエの駆除作業をするため村に来た中

国の志願軍を案内した。3日後から、30世帯ほどの村で一斉に病気が流行り始め、村人は「熱病」と呼んだ。高熱が出、嘔吐、下痢などの症状を呈して、20人ほどの患者のうち8人が死亡した。

峠をはさんで隣接するクムボ里に住んでいたキム・ヒョンウォンさん(1938年12月19日生)は、村近くにあった自分の家の綿花畑で細菌弾とみられる容器が見つかったと両親から聞いている。容器は志願軍によって持ち去られていたが、その周辺に羽が長く白い斑点のある黄色っぽいハエが多数、散らばっているのを目撃した。15戸ほどだったヒョンウォンさんの村では、1週間の間に男性2人、女性1人と子ども1人の計4人が死亡した。このうち3人はヒョンウォンさんの親戚筋に当たる。症状は、シム・ドクファさんのケースと似ているが、下痢は見えていないという。

キム・チンハクさん、シム・ドクファさん、キム・ヒョンウォンさん3人が住む平原郡では今、朝鮮戦争中の米軍の戦争犯罪に関する被害調査が進んでいる。2000年6月の南北共同宣言以降、南北朝鮮で並行して進められているものの一環だという。平原郡では、村役場に当たる人民委員会が主導し、細菌戦を含む米軍による戦争犯罪の被害者名簿作りに取り掛かっている。

人民委員会のチャン・ビョンイル指導員(1960年5月25日生)からも話を聞いた。チャンさんは郡内のチョムボ里、ボパン里、クムボ里などを担当している。郡内では、当時、米軍機来襲の音がしても、爆発の音がしない奇妙な爆弾が目撃されたとの証言が相次いでいる。細菌弾が落ちた地域では、早くて3~4日、遅くても10日後ぐらいから発病者が出始め、次々に病気は伝染していった。死亡した村人は、45歳から60歳の男性が多かったという。昆虫などの駆除作業に動員されたのは男性が多く、45歳以下は軍隊に入っていた人がほとんどだったからのようだ。これまでの調査で、チャンさんが担当した郡内3つの里では当時、120戸ほどの家があったが、その中で約80人が犠牲になったことが判明したという。チャンさんは、こうした被害調査を、「人名被害調査票」としてまとめている。

チャンさんは、米軍の細菌戦に対し「通常爆弾の死は直撃弾があたって即死する。だが、細菌戦だと、被害者は長い期間、苦しめられる。戦争自体はもちろん、殺し合いだが、細菌まで

使ったことは絶対に許されない。親戚や身寄りを失い、その後、つらい経験をしてきた人が今も健在している。にもかかわらず、細菌戦実施を未だに否定するとは、非人間的で破廉恥な行為だ。細菌戦に直接、手を染めた戦争犯罪人は、世界の前で謝罪し、被害者に補償しなければならない」と力を込めた。

元731隊員ら日本関与の追及を

朝鮮戦争下の米軍による細菌戦実行に関して、日本（人）の関与については、未だ確証に至るものがない。前回報告にも書いたが、東側の報道では、旧731部隊の初代、第二代部隊長だった石井四郎と北野政次、731部隊の姉妹部隊で植物、動物を対象にした細菌戦の研究、実践を担当していた100部隊の部隊長、若松有次郎らが米軍の顧問として朝鮮にわたったというニュースが流れている。

推理作家の檜山良昭氏は1979年、『小説現代』に「細菌戦部隊の医師を追え」と題した「小説」を発表している。これが後に同名の題で講談社から単行本化された。かなり事実に基づいた「小説」だ。これには、「西野政三」という名で北野政次と思われる人物へのインタビューの内容が盛り込まれている。「西野」はこの中で、朝鮮へ渡ったことについて、あっさりと肯定している。「これもあなたがたは調べているだろうが、私たちは朝鮮戦争のときにアメリカ軍に協力するために朝鮮にわたった。むこうでどんなことをしたかは、まあ想像してくれたまえ」と（同書P105）。その他、同書にはほかにも、朝鮮に出向き、細菌戦実行に関与したことを"自白"する元731隊員の医師が登場する（これらのインタビュー内容が事実かどうかは未確認）。

残念ながら、北野らが朝鮮で細菌戦に関与したという確証は、未だ得ることができていない。だが、疑いは限りなく濃い。

最後に、米軍の細菌戦実施説を否定する側の主張、言説について、前回報告以降の動きに若干、触れておきたい。

かつて『侵略の舞台裏——朝鮮戦争の真実』（シアレヒム社、鄭敬謨・金井和子訳、1990年）で細菌戦疑惑について1章を割き、「作戦が実験的なものであれ、心理攪乱的なものであれ、ア

メリカが徹底的な無実を主張し、それを相手に納得させることは、むづかしいように思われる」（同書P231）と米軍の実行説を支持していたオーストラリア国立大学教授のギャヴァン・マコーマック氏は、2004年に出した著書『北朝鮮をどう考えるのか——冷戦のトラウマを越えて』（平凡社、吉永ふさ子訳）では、それまでの自説を覆した。「細菌戦事件は、中国、北朝鮮、ソ連の手で複雑に仕組まれた不正な国際的陰謀であったことがほぼ確実になった」（同書P47）というのだ。前回報告に書いた、ロシア公文書館の中から『産経新聞』が見つけたという文書資料が根拠のようだ。

東京の国際基督教大学で客員教授も務めるマコーマック氏に、森氏とともに2004年夏、会った。氏は「以前は、五分五分より少し米軍実行説を信じる側に立っていたが、今は反対に若干、疑問を感じる側に変った」と話した。和田春樹・東大名誉教授が、米軍実行説に疑問を提示していることなどについても、私たちの間で議論になった。『産経』記事に掲載された文書資料については、カナダ・ヨーク大学のステファン・エンディコット教授らが詳細に検証し、否定説に対し詳細な反駁を加えている（前回報告で既述）が、記事の影響は大きい。さらなる調査、研究が求められる。